

## 出口コレクションの一断片によせて

二五四

西脇常記

はじめに

一九三〇年代に出口常順氏がベルリンで手に入れたトルファン文書（以下「出口コレクション」と略稱する）百数十点については、かねてより故藤枝晃氏を中心に研究が續けられてきた。一九七八年には『高昌殘影』圖版（法藏館）が出版され、このほど二〇〇五年三月には、『釋錄』の部が『トルファン出土佛典の研究』として出版された。

筆者も、ベルリン・トルファン・コレクションの研究において、出口コレクションに觸れ、またその中のいくつかの断片は論文の中で利用した。例えば、「星占書」と名づけられた三三一甲乙（圖版 Pl. LVII）は、ベルリン・トルファン・コレクション所収の断片 Ch. 1830 (T. II 1829) 以下と一分の隙もなく接續できる文獻だったので、合わせて取り上げたのである。<sup>①</sup>

いま『釋錄』の上梓によって改めて圖版と並べて見てみると、多くの注目すべき事實が浮かび上がる。同時にまた時代とともに進む研究の新しい展開も見ることが出来る。その原因の一つは、圖版出版から『釋錄』出版までに四半世紀が経過したことであろう。この間の研究の深化は著しい。『高昌殘影』圖版が出版されて以來、前世紀の八〇年代ころからは、各國に散らばって藏されている敦煌・トルファン文書を多くの研究者が實見できるようになり、また同時に種々の鮮明な圖版の出版やインター

ネット上での畫像の公開も行われるようになった。そうした研究者の世界的なネットやメディアの發達が研究に大きく寄與しているのである。

最近筆者は、ベルリンでトルファン・コレクションのデジタル圖像化のワーク・ショップ<sup>②</sup>に出かけ、数年ぶりにコレクションの一部を見る機会に恵まれた。こうした電子機器による圖像化や漢字文獻の瞬時の檢索は、四半世紀前には全く豫想もできなかったことである。そこで氣づいた事實と一つの新たな發見について述べてみたい。

### I 「論語疏」から「法華玄贊疏」へ

『高昌殘影』圖版では「論語疏」とされた、縦一三・〇cm、横一一・〇cm、僅か七行の断片がある。『釋錄』から移録すると以下のようである。

1 □□秋

□□諡也。善問周禮

孔。名丘。字仲尼。仲者

有中和之德。故字仲尼也。

5 「疏。兵食信三。信不可棄者。『論語』顏淵。子貢問政。子

曰。足食足兵。民信之矣。子「貢曰。必不得已而去。於斯三」者何先。曰。去兵。必不得已而

（『は朱の見出し點。□、句讀點、各種のカッコ、洋數字は編集者がつけたもの）  
 ところが『釋錄』には「論語疏」のタイトルはなく、「法華玄贊疏」となっている。筆者は中國思想史を研究していることもあつて、十年近く前にこれを見て、「論語疏」のタイトルに惹かれ關心をもつていた。もちろん現在傳わっている『論語』の注疏類には見えないものであるが、傳世作品は注疏類のごく一部であり、誰かの作品の逸文ではないかと考えていたのである。誰の作つた「疏」であるか、電子機器による検索をかけてもヒットしなかつた。ところが『釋錄』では「法華玄贊疏」と改められているので驚いた。儒書ではなく佛書だつたからである。筆者が検索をかけていたのは外典であつて、内典でなかつたことは言うまでもない。『釋錄』の解説「同定」に

文章の内容と疏字とにひかれて、圖版では表題を「論語疏」としたが、これは誤りであつた。第5行以下に「兵食信三。信不可棄」の文章を引用するが、「兵食信云々」の句は『論語』にはみえないものである。むしろ窺基『妙法蓮華經玄贊』（大正藏一七三號、第三四卷六六二頁中段二八〇二九行）に見え、そこでは、「兵食信云々」の句の前に「宣尼云」とある。すなわちこの斷片の前半は、ここの「宣尼」の注釋であることが知られ、前後を通じてみれば、『法華經玄贊』の注釋書の斷片ということになる。

（頁二七、下段）

という。

上の解説には述べられていないが、この發見は、われわれ研究者達が最近大いに恩恵を被つてゐる、『四庫全書』や『大藏經』のCD-ROM（臺

出口コレクションの一斷片によせて

灣、蕭鎮國にはじまる）による検索活用の成果であろう。これらによる検索は、前世紀末から今世紀のはじめに、瞬く間に研究者たちに廣まつた。この手段を用いない限り、僅か七行残されたこの斷片を佛典と言ひ切ることは難しかつたと思われる。

さてこの斷片は『法華經玄贊』の注釋書」といわれるが、『釋文』ではそれは同定されておらず

『法華經玄贊』の注釋書としてはいろいろの本が傳わり、それらは、『大日本續藏經』に收められる。すべて窺基門下の學匠による『玄贊』の講義の筆録、ないしその類の注釋を編集したものであり、精粗は一様でない。しかし、この斷片とまったく合致する注釋書はない。

という解説で終わつてゐる。

## II 契丹經藏・章疏類の發見と同定

結論を先に述べれば、件の斷片は同定のできる『法華經玄贊』の注釋書である。同定できたのは全くの偶然であつた。一九七四年、山西省應縣佛宮寺の木塔の第四層に安置されていた釋迦像の胎内から十二卷の契丹大藏經の端本とともに多くの契丹刻本の佛典章疏類、つまり注釋類が發見され、研究者の注目を集めた。その報告は一九八二年第九期『文物』においてはじめて行われ、一九九一年になつて典籍類の寫真と解説を付したものが、『應縣木塔遼代祕藏』のタイトルの下に文物出版社から出版された。そこに載せる刻經作品の中に遼の唯識法相學僧であつた詮明の著作「法華經玄贊會古通今新抄卷第二」が含まれていたが、その「四十

一」紙を見ていて、出口コレクションの件の断片に筆寫する部分であると氣づいたのである。<sup>③</sup>

この塔は遼・清寧二年（一〇五六）に創建されたものであるから、そこに藏された諸佛典・注疏類はそれ以前に成立したものであり、生卒も明らかでなかった証明の活躍時期もほぼ確定できるようになった。發見された『上生經疏科文』には、「燕臺憫忠寺沙門証明改定」と記されており、その卷末の題記には「時統和八年歲次庚寅八月／癸卯朔十五日戊午故記／燕京仰山寺前楊家印造／所有講讚功德／廻施法界有情」とあることなど、の新しい情報から、証明は五代の後唐天成（九二六—九三〇）に生まれ、遼の聖宗の統和末（二〇—二二）ころに没したことが確かめられたのである。彼は燕京の名刹であつた憫忠寺（その創建は遠く唐の太宗に遡る。現在の法源寺）に住した唯識の學者であり、鈔主無碍大師と稱した。彼が詮曉と改名したのは穆宗（在位：九五—九六九）の諱「明」を避けたためである。彼は唯識の専門家であるばかりでなく、『開元釋教錄』以後の新譯佛典の整理にも着手し、『續開元釋教錄』三巻を編み、また希麟に『續一切經音義』の撰述を勸めている。

さて『玄贊』は、正式な名稱を『妙法蓮華經玄贊』といい、唐の慈恩窺基の作品である。証明の注釋「法華經玄贊會古通今新抄」は慈恩學者、窺基の注釋に基づき、唐代以來の諸僧の注釋の成果を總合したものである。彼は『玄贊』の贊の部分を逐次摘句して注をつけている。その注のつけ方で注目を引くのは、内外典籍からの引用で、その引用もある場合には独自の節略があつたり順序をかえたりして原文そのままではないこと、外典の引用がひとときわ目立つことが指摘されている。<sup>④</sup>

このことは出口コレクションに收められた件の小断片を檢討することからも首肯できる。『玄贊』の「宣尼云兵食信三。信不可棄」に對し、証明は外典の一つである『論語』顔淵篇の文章を引くが、それは原文のま

までではなく、また「孔注」の文章も引いている。さらに「宣尼」の注は、「諡法解」によれば「善問周道（道は「達」の誤りか）」には「宣」の諡をつけること、そして王莽が平帝の元始元年（西曆一年）に孔子を追諡して褒成宣尼公としたことを言っている。「仲者中也、尼者和也云々」以下はそのままの形では古典籍に見えないが、漢の儒者、張禹の説と重なる部分があり、<sup>⑤</sup>おそらく証明以前の儒者の解釋を踏まえたものと考えられる。このように見えてくると、外典にも相當の知識を有している遼の佛教學の水準の高さを改めて認識させられるのである。

最後に確認のために、件の断片の前後の文章を、新しく發見された「法華經玄贊會古通今新抄卷第二」から引用する（太字は窺基『玄贊』の句。句讀點は筆者による）。

○疏。建名道之

資糧<sup>⑥</sup>等者、夫欲建立名聞道德、必須藉信以爲資糧、

言宣尼者、卽是諡也。善問周道曰宣。此卽王莽爲

仲尼作諡。姓孔、名丘、字仲尼。仲者中也、尼者和也。

以夫子行五常之教、有中和之德、故字仲尼也。今從

諡從字、云宣尼也。○疏。兵食信三、信不可棄等者、

論語顏淵篇云、子貢問政。子曰、足食足兵、民信之

矣。子貢曰、必不得已而去、於斯三者何先。曰、去兵。必不

得已而去、於斯二者何先。曰、去食。自古皆有死、人無信

不立。<sup>⑦</sup>言大車無輓等者、論語第

二爲政篇云、子曰、人而無信、不知其可也。如大車無輓・小車

無軌、其何以行之哉。

<sup>⑥</sup> 資糧、死者古之常道、人皆有之、治邦不可失信也。

<sup>⑦</sup> 言大車無輓等者、論語第

### III 証明と遼の法相學のひろがり

上で述べたように、二〇世紀末に山西省應縣佛宮寺釋迦塔から発見された遼代の佛典によつて、出口コレクションの件の斷片は、証明による唐の窺基『妙法蓮華經玄贊』の注釋「法華經玄贊會古通今新抄卷第二」の一部であることが分かった。これ以外にも、発見された文物の中には証明の作品が數點あつたが、いずれも傳存しない貴重なものであつた。いま上記作品も含め、報告書等に従つて記せば、以下のようである。

- i. 法華經玄贊會古通今新抄 卷二卷六
- ii. 上生經疏科文一卷
- iii. 成唯識論述記應新抄科文 卷二卷三

これより先、一九三三年には、山西省の趙城で発見された金藏から、證明の作品として

- iv. 上生經疏隨新抄科文一卷
- v. 上生經疏會古通今新抄 卷二卷四

が見出されていた。

これらの証明の作品は、十一世紀末に宋に入り佛典・章疏類を集めた高麗の高僧、義天(一〇八五—一〇八六に入宋)の『新編諸宗教藏總錄』(宋・哲宗・元祐五年、遼・道宗・大安六年、一〇九〇年成立)に証明の作として著録された、以下の六種七五巻にも含まれる。

法華經科四卷 大科一卷

出口コレクションの一斷片によせて

- 法華經會古通今鈔十卷  
 金剛般若經宣演科二卷  
 金剛般若經宣演會古通今鈔六卷  
 金剛般若經消經鈔二卷 科一卷  
 彌勒上生經科一卷 大科一卷  
 彌勒上生經會古通今鈔四卷  
 成唯識論詳鏡幽微新鈔十七卷  
 成唯識論應新鈔科文四卷 大科一卷  
 百法論金臺義府十五卷  
 百法論科二卷 大科一卷  
 續開元釋教錄三卷 詮曉集(舊名證明)

また同じ頃、北宋の都である汴京に赴いた我が國の法相宗學僧、成尋の旅行記、『參天台五臺山記』卷七、熙寧六年(一〇七三)二月廿八日の條には、「地北多く慈恩宗を學ぶ。予、玄贊を學ぶ由、告げ示さる。小僧、攝釋・鏡水抄有りや無しやを問うに、無き由を答えられ、給するに契丹僧作れる證明抄を以てせらる。玄贊を釋せる書なりという」の記事を残しているが、そこに言及された「證明抄」は、『玄贊』の注釋と云うのであるから、義天の記した書目や新しく発見された遼刻經にある「法華經會古通今鈔(法華經玄贊會古通今新抄)」に他ならない。

當時、宋と遼とは敵對關係にあり、とりわけ書禁が厳しかったことは、証明と同じく遼の學僧であつた行均撰述の漢譯佛典解讀字書『龍龜手鏡』がいかにして宋に傳つたかを述べる記事の中で、『夢溪筆談』の觸れる所である<sup>⑧</sup>。それにもかかわらず、証明の作品が、當時宋の都であつた汴京にも傳來して、それを成尋が手に入れたという事實は、以下のことを物語るであらう。すなわち、遼僧証明は、唐の窺基の唯識法相學

を伝える中心的學僧であり、遼の佛教學は、從來の研究で明らかにされていた華嚴教學の盛行に加えて、慈恩(窺基)教學、唯識學においても強くその存在を示すものだったのである。

上に列擧した説明の作品は、ほとんどが佛典の注疏類であり、しかもそれはまた慈恩(窺基)の注釋したものと重なる。中にはここで取りあげた『法華經玄贊會古通今新抄』のように慈恩(窺基)の注釋にさらに注釋を加えたものも含まれる。對應表を記せば次のようになる。

慈恩(窺基)

百法明門論解

成唯識論述記

金剛般若經宣演

觀彌勒菩薩上兜率天經疏(贊)

妙法蓮華經玄贊

説明

百法論金臺義府

成唯識論詳鏡幽微新鈔

成唯識論應新鈔科文 大科

金剛般若經宣演會古通今鈔

彌勒上生經疏會古通今新抄

法華經玄贊會古通今新抄

以上から遼の時代に慈恩(窺基)教學とその立場に基づく唯識學が盛んであったことは十分確認できるのであるが、さらにそれを裏付ける発見があつた。説明の校定した窺基撰「觀彌勒菩薩上生兜率天經疏」二卷の上巻の刻本が、最近見つかったのである。<sup>⑤</sup>その尾題には「燕臺憫忠寺講唯識論法華經釋詮曉定本」と見え、しかも經文の最初、經疏の最初にはすべて朱の符號がつき、いたるところに注や句讀のための朱筆によるテキストへの書き込みがある。講經テキストとして利用に供していたことを伝えるものである。

この流行が高麗僧義天や日本僧成尋によつて記録されていることは、慈恩(窺基)教學と説明の唯識學關係の佛典注釋書が、高麗や日本といつ

た、遼から見れば東の地域に傳播したことを示唆し、出口コレクションの小断片は、西のトルファンに傳わつたことを明示する。

トルファンと並ぶ、もう一つの西の文書發現の地、敦煌からは、すでに研究者たちによつて慈恩(窺基)の作品が確認されている。それらによれば、

北京圖書館「號」66、「結」43・48、「尺」68、「河」39、「黃」12、ペリオ二一八、二二七六、三八三二、スタイン一五八九、二四六五、三七一三V(表題のみ)

が「玄贊」の寫本である。<sup>⑥</sup>また上海博物館の「上博一二(三三〇三)」は、表題は「法花經疏卷第二」となっているが、「法華經玄贊」卷二である。<sup>⑦</sup>

これらの寫本は當然、その書寫年代が問題になるが、上記の「尺」68、「號」66、「河」39、スタイン一五八九、二四六五、三七一三Vはチベット支配期(七八六―八四八)から歸義軍期(八四八―一〇〇〇頃)のものと判定されている。しかも朱點や朱カギが施され、學習されていたことを傳えている。<sup>⑧</sup>さらにペリオ二一五九Vは、「妙法蓮華經玄贊科文卷二大科一卷」の表題に續いて「燕臺憫忠寺沙門説明科定」と見える寫本である。説明の「科段」がある以上、敦煌にも彼の「玄贊」注である「法華經玄贊會古通今新抄」が傳わつていたことは想像するに難くない。

おわりに―今後のトルファン漢語文書の研究方向にむけて

以上、出口コレクションの一断片が唐の窺基『玄贊』の注釋書『法華經玄贊會古通今新抄』であること、その注釋者の説明は遼の聖宗(在位：九八二―一〇三二)期に活躍した唯識の學僧であること、その作品は當時、遼で流行したばかりでなく、隣國の宋や東の高麗<sup>⑨</sup>・日本、西のトルファン・敦煌にまで渡つたことを述べた。

ベルリン・トルファン・コレクション<sup>①</sup>、Ch1215r. u Mainz732 (THY21)<sup>②</sup>が窺基『妙法蓮華經玄贊』の漢語とウイグル語の断片と確認されており、前者の寫本年代は九世紀から十世紀と判定されている。従って、出口コレクションの証明『玄贊』注の断片と結びつければ、トルファンの地に慈恩(窺基)教學と証明の唯識學關係の佛典注釋書が傳播したことは、一段と確實になる。

竺沙氏はペリオ二一五九v「妙法蓮華經玄贊科文卷二」に關して、遼から直接に敦煌に入ったと推測している<sup>③</sup>。これは、トルファンにおいても言えることで、遼の証明の唯識學關係の佛典注釋書は直接にもたらされたものであろう。この推測は、十世紀はじめにトルファンに建國された天山ウイグル王國と五代の周や契丹とは交易が行われ、使節の往來もあつたらしいことによつて補強される。宋建國後間もない、九八一年にこの國に使節として向かつた王延徳はウイグル王の前で敵對する契丹使節と言ひ争つてゐる<sup>④</sup>。

証明の勸めで希麟が撰述した『續一切經音義』の断片も、ベルリン・トルファン・コレクションの中に確認されている<sup>⑤</sup>。同時代の行均の『龍龕手鏡』刻本断片も存在する<sup>⑥</sup>。また出口コレクションの五〇九『雜阿含經』(釋文『二六四以下])は契丹藏であると言われている。これらも恐らく遼からトルファンに直接入つたものであろう。

かつて上山氏によつて、曇曠(七世紀末から八世紀後半)や法成(九世紀。曇曠の佛教學をよく繼承する)による敦煌の教學は明らかにされたが、遼の佛敎文化を受けたトルファンの佛敎學の實態は、現在までの研究では明らかになつていない。敦煌に比べてまとまつた文書や大きな寫本が期待できないトルファン研究においては、ドイツをはじめとする各國調査隊の持ち歸つた断片<sup>⑦</sup>の緻密な調査を積み重ね、史料の層を厚くすることが、當面至近の道であらう。ベルリン・トルファン・コレクションの漢

語佛典断片目錄はすでに二冊が出版され研究者の用に資してきたが、さらに三冊目が二〇〇五年末に出版された<sup>⑧</sup>。その完成も研究の深化に寄與するはずである。

またトルファン文書は、敦煌文書に比べて古い層の漢語文書を含んでおり、さらに唐の支配下に置かれた時期があつたために、中原で失われた文書が多く保存されている。そのため、これまでの研究は寫本を中心として、その制作年代が注視されてきた。一方で十世紀に本格的にはじまる印刷刻本の調査は、これまでほとんど行われてこなかった。しかし契丹藏や章疏の刻本が証明の生卒や活躍時期を探る上で大きな貢獻をしたように、印刷刻本も疎かにはできない。上記のような事情のあるトルファン文書においては、殊に重要であらう。契丹藏を初めとする刻本の佛典が、最近の新發現および研究で徐々にその形態を明らかにしていることも力を添える。また漢語に限定することなく、ウイグルを初めとする胡語文獻の研究を組み込むことの成果も、上記した通りである。こうした多元化した研究が進めば、遼とトルファン、あるいは宋とトルファン、また金とトルファン、元とトルファンとの關係も明らかにになり、トルファンひいてはアジアの佛敎と文化の實態が明らかにされるに違いない。先にも述べたように、この四半世紀の研究環境の進展には著しいものがある。それらに即したコレクションの再検討が待たれているのである。(二〇〇六年八月三〇日)

#### 注

- ① 拙稿「日月蝕・地震古書について」(『ドイツ將來の漢語文書』二一〇〇二、京都大學學術出版會)頁一四〇—一六五)及び「Nishiwaki: A Divination Text Regarding Solar Eclipses, Lunar Eclipses Earthquakes Based on the Correlation with Days in the Twenty Eight Lunar Mansions in Turfan Revisited — The First Century of Research into

*The Arts and Cultures of the Silk Road* (Dietrich Reimer Verlag Berlin 2004, S.240-248).

- ② ワークショップのプログラム・内容については BBAW → Forschung → Turfanforschung → Deutsch → Workshop 2005 参照。
- ③ 出口コレクションの1行目「□□秋」は「□□秋」である。「法華經玄贊會古通今新抄卷第二」では「宣尼云」以前にこの文言は確認できないが、以後に見える。寫本の段階で「疏」の順番は「…春秋…宣尼云…」であったものが、何らかの理由で刻む際に「…宣尼云…春秋…」と配列順序が代わったものと考えられる。
- ④ 証明の事跡については張暢耕・畢素娟「論遼朝大藏經的雕印」(『中國歷史博物館館刊』九(一九八六年)所收)参照。竺沙氏は証明の生卒についての兩氏の説は妥當としながらも、『契丹藏』の主編は証明であつて聖宗朝(九八二—一〇三二)に雕印されたとする兩氏の基づく資料には疑義を懐く。『宋元佛教文化史研究』第一部、第四章「新出資料よりみた遼代の佛教」(頁二〇一—二〇二)(汲古書院、二〇〇〇)参照。
- ⑤ 注④に引く竺沙氏の書参照。
- ⑥ 長洲余蕭客撰『古經解鈎沈』卷二四「孝經」仲尼居に「仲者中也、尼者和也、言孔子有中和之德、故曰仲尼。張禹說」。
- ⑦ 「等」の一字は寫本にはない。「疏」文の他の箇所にも頻繁に用いられているので、おそらく筆寫の際に抜けたものと思われる。
- ⑧ 『夢溪筆談』卷十五に「幽州僧行均集佛書中字爲切韻訓詁、凡十六萬字、分四卷、號龍龕手鏡。燕僧智光爲之序、甚有詞辨、契丹重熙二年集。契丹書禁甚嚴、傳入中國者法皆死。熙寧中有人、自虜中得之、入傳欽之家。蒲傳正帥浙西、取以鏤板。其序末舊云重熙二年五月序、蒲公削去之。觀其字音韻次序、皆有理法、後世殆不以其爲燕人也」と見える。
- ⑨ 李際寧『佛經版本』(江蘇古籍出版社 一九九九)頁一〇〇。この木版は上巻の途中から上巻末までで、大正藏三八、二八四aから二八六bにあたる。李際寧氏の解説にもどこから出たもので、どのような形で保存されていたかはふれられていない。
- ⑩ 平井宥慶「曇曠と法華經疏」(『印度學佛教學研究』二五—二、一九七七)、上山大峻「唐代佛典の西域流傳の一面—『法華玄贊』の出土寫本を

- めぐって」(唐代史研究會編『隋唐帝國と東アジア世界』汲古書院 一九七九)。後に少しく訂正補正を加えられ、同氏『敦煌佛教の研究』(法藏館、一九九〇)第四章、第一節、三、頁三六六—三七三に所收)。「敦煌學大辭典」頁六九〇「法華經玄贊」の項を参照した。
- ⑪ 『上海博物館藏敦煌吐魯番文獻集成』①、上海古籍出版社、一九九三。
- ⑫ 上山、上掲論文。
- ⑬ 梶浦晉氏より韓國の名刹の一つである松廣寺から『法華經玄贊會古通今新抄』卷一、二が發見されているとの情報を得た。『松廣寺 佛書展示圖録』(松廣寺 聖寶博物館 二〇〇四)の説明文によれば、松廣寺の天王門と四天王像の補修中に四天王像内部から發見された經典の中に含まれていた。義天が宋や遼、あるいは日本から集めた古逸の章疏類は、後に自らの手で續藏經として出版した。その重修本は世祖時代(一四五六—一四六八)に刊行されているが、今回發見されたのはその一部で十二種十四點であると言われている(二〇〇四年四月八日の [donga.com](http://donga.com) のインターネット記事参照)。發見された『法華經玄贊會古通今新抄』卷一の初めには翰林學士金紫崇祿大夫行尚書工部侍郎知制誥上柱國劉晟(聖宗朝「九八二—一〇三二」の詔敕起草官)の「序」があり、割注として「宋本無字、遼本有之、寫而彫出、以補其闕」と見える。この「序」が義天が宋から持ち歸つたもので、續藏經テキストになったものとするれば、「宋本」の『法華經玄贊會古通今新抄』が存在していたことを伝える貴重な記録と言える。
- ⑭ Fujieda Akira, Schmitt, G., Thilo, T. und Inokuchi Taijun: *Katalog chinesischer buddhistischer Textfragmente*, Band 1, Berlin, 1975, S.181
- ⑮ 百濟康義「ウイグル譯『妙法蓮華經玄贊』(一)」(『佛教學研究』三六、一九八〇)、同「妙法蓮華經玄贊のウイグル譯斷片」(『内陸アジア・西アジアの社會と文化』、一九八三) 参照。
- ⑯ 竺沙、前掲書、第一部、第三章、四節「東アジアにおける遼佛教の位置」、頁七三。
- ⑰ 『宋史』卷四九〇、外國列傳、高昌。伊原弘・梅村坦『宋と中央ユーラシア』(中央公論社、一九九七)、頁三〇四以下参照。
- ⑱ Ch/U 8206 (MIK 030514): 大戦末期ベルリン空襲の直前に、一くく

りの寫本を収めた箱が疎開された。此の箱は、戦後はソ連管理下におかれ、六十年代の末に當時の友好國、東ドイツのライプツヒ民俗學博物館に返還され、ドイツ再統一直前の八十年代末に、西ベルリン郊外のダームにあるインド美術館に移された。この断片はその中の一片である。

⑱ T.Nishiwaki: *Chinesische Texte vermischten Inhalts aus der Berliner Turfansammlung* (2001, Franz Steiner Verlag Stuttgart) Nr.40, 圖版 (Tafel) 4.

⑲ 大谷探検隊がトルファンから將來した文書の大部分は現在、旅順博物館に保管されている。龍谷大學と旅順博物館の共同研究が近年行われ、その全貌が徐々に明らかになってきた。最近出版された研究報告論文集『旅順博物館藏新疆出土漢文佛典研究論文集』二〇〇六、龍谷大學佛敎文化研究所・西域研究會)によれば、旅順博物館には約二萬三千點の漢語トルファン文書が存在する。因みにヘルリン・トルファン・コレクションの漢語文書は約六千點と言われている。

⑳ *Chinesische und Manjurische Handschriften und seltene Drucke Teil 4, Chinese Buddhist Texts from the Berlin Turfan Collections Volume 3, Compiled by Kogi Kudara Edited by Toshihaka Hasuike and Mazumi Mitani* (2005, Franz Steiner Verlag Stuttgart). 「Ch」記號を冠する一〇七〇枚の断片が同定される。先の二冊の目録と異なるのは、寫本の書寫年代が記されない點である。また、寫真も一枚も付けられていな

い。その理由は、断片のデジタル化が進み、極めて近い將來に漢語断片も電子メディアを通して見られることによる。

㉑ 出口コレクションの五〇三『蘇悉地供養法』(『釋錄』頁二五五以下参照)は勅版北宋版(開寶藏)の断片である(竺沙、上掲書、頁三一四)。また第一冊の目録には、單に「印刷本」とのみ注記され注目されなかった。ヘルリン所藏の Ch/U6412r は同經であり、その下部に接續する Ch/U8098r ともに開寶藏である。さらに Ch/U7326r は『大般若波羅蜜多經』の小断片であるが、これも開寶藏であろう。

㉒ 出口コレクションの五〇四『妙法蓮華經』は金藏である。これは宋の開寶藏系の金版大藏經を每半葉六行の蝴蝶裝本に改裝したものとされる(『釋錄』頁二五八以下参照)。この形式のものは、敦煌北區石窟(B一六八窟。この窟は「一」元)時代のものと考えられている。敦煌莫高窟北區石窟(B157-B243窟)情況登記表」頁三七〇参照)からも發見されている。『敦煌莫高窟北區石窟』第三卷(文物出版社、二〇〇四)、頁一六四―一七六 圖版一〇〇(c)の『大寶積經第九十四卷』参照。またヘルリン・コレクション B2は金版『大般若波羅蜜多經』の断片であることが分かっている。百濟康義「イスタンブール大學の東トルキスタン出土文獻」(『東方學』八四)参照。

(同志社大學文學部教授)